育てよう！　地域のちから
－子どもたちを育む“地域社会”の創造－
（概要）

安心して子どもたちに未来を託そう

子どもたちは「ヒトの子」である。本来、「自ら学び、自ら考え」、「実生活上での課題を実践的に解決する能力」を持っている。その能力を引き出す場をつくり、子どもたち（誕生から 25 歳頃までの子どもや青年）の自律を手助けするのが大人の務めである。

しかし、物質的に豊かになるのに反比例するかのように、子どもたちを巡る暗い現象が目立つようになり、子どもたちを取り巻く社会環境が悪化している。子どもたちの教育を学校や教師に預けていないだろうか。大人は子どもたちの本当の意味での自律を手助けしているのだろうか。責任を持って、子どもたちを育むための地域活動に取り組んでいるのだろうか。

子どもたちは未来の地球社会を背負っている。社会が責任を持って子どもたちを育んでこそ、安心して子どもたちに未来を託すことができるようになろう。

Ⅰ　子どもたちを育む社会環境をめぐる問題

１　貧弱になった子どもたちの社会環境

①子どもたちには、多様な人々と出会う機会が失われてきている。
②親たちは子どもの教育を学校や行政に預けている。
③大人も子どももインフォーマルな場での人間関係が希薄になっている。
④生活の中での多様性が失われてきている。子どもが持っている可能性は、人間生活が本来持っている性、年齢、関心の多様性や多面性のなかでこそ花開くものである。

２　大人の責任

①「ヒトの子」として生まれてきた子どもたちはみな学びたいという強い意欲を持っているが、教育に対する大人の関心は、学業的な成績にのみ集中する傾向がある。

学力とは、子どもたちが「自ら学び、自ら考えて、実生活上での課題を実践的に解決する能力」であって、知識量だけではない。

②大人自身も、複雑で多様な人間関係の中で、家庭や地域社会を上手に管理・運営し、常に発生してくる課題を解決していく創造力（＝社会力）を失いつつある。大人は、地域社会を再生・創造して、子どもたちを育む社会環境を作り直すための行動を今すぐ起こして、社会力を取り戻す必要がある。

Ⅱ　社会参加・体験の中で変わる子どもと大人

１　大人とのかかわりの中で育つ子どもたち

「人を肯定的に捉え、今を積極的に生きている」大人を見て、子どもたちは社会的人間として成長するものである。

（1）自分で自分の未来を決める

中学卒業の 15 歳頃までに子どもたちは自分で自分の将来を選択できるようになる必要がある。そのためには、年齢の低い段階から子どもたちの多様な社会参加と仕事体験の場をつくり、子どもたちが社会や仕事への具体的なイメージを獲得できるようにしなければならない。

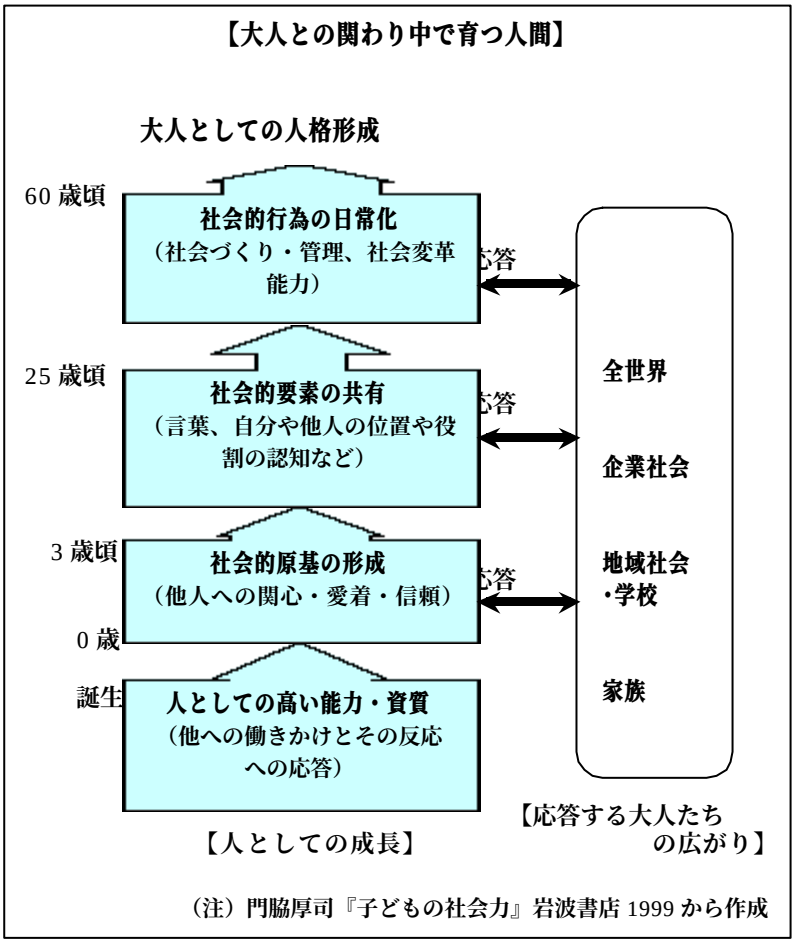
（2）生きる自信を獲得する

積極的に生きている大人とのふれあいが社会的意義のある社会活動・仕事に参加したいという子どもたちの生きる意欲・積極性を生み出すことは良く知られている。子どもたちは社会参加によって自分らしさを発揮し、社会に一定の役割を果たしたと自覚できるとき、達成感を得て、さらに前向きの姿勢を獲得していくであろう。「生きる力」とは、「世渡りのテクニック」ではない。

（3）人への愛着や信頼を獲得する

①子どもたちは、「ヒト」として非常に高い能力・資質を持ってこの世に誕生してくる。その能力・資質を基盤にして誕生から 3 歳頃までに、子どもたちは、大人社会との応答の中で人への信頼や愛情を育んでいくのである（「三つ子の魂、百までも」）。

人への信頼や愛情をベースにして、４歳頃から青年期にかけての子どもたちは、次第に広がる大人社会との応答を通して、社会生活に必要な諸要素を自分の中に積み重ねていき、その後の成長の基盤を形成する。



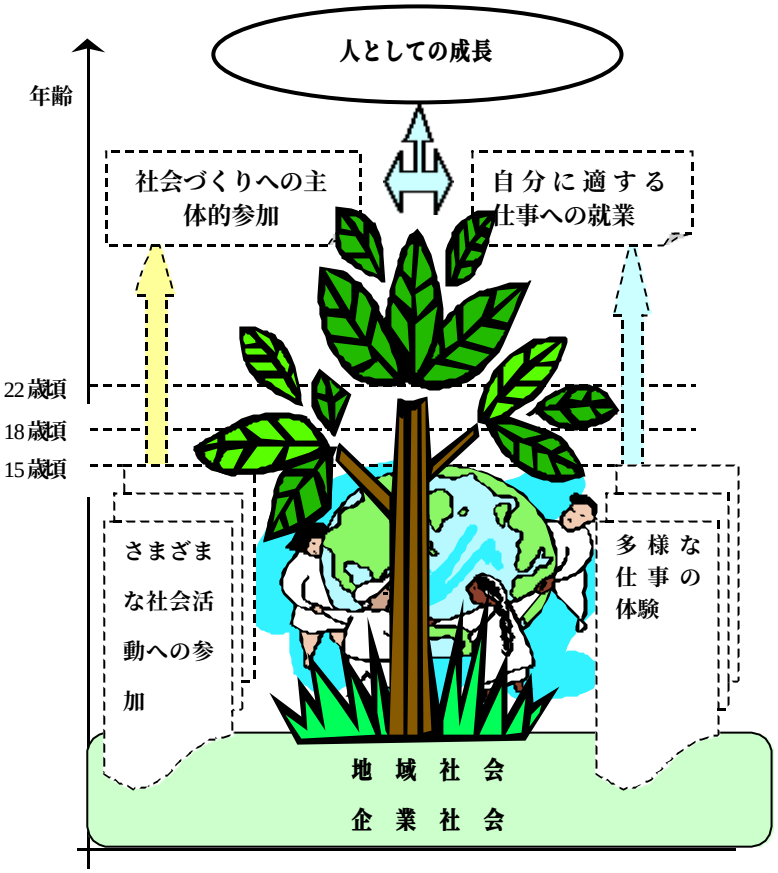
（注）門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店 1999 から作成

②子どもたちが育つ場は家族から全世界へと次第に広がっていくが、特に中学生までの時期には身近な地域社会が子どもの全生活領域である。地域社会こそ子どもが育つ上でもっとも大切な基盤である。

（４）実践的社会づくりに参加する

①子どもたちは、年齢の低い段階から大人と一緒になって「自分たちの置かれている環境・社会に積極的に関わる」実践的プロジェクトに自主的・積極的に参加すべきである。子どもたちは、その中で汗を流し、悩み、挑戦し、失敗し、仲間と助け合い、何かをやり遂げることを通じて、社会や仕事の現実に触れ、社会活動や仕事への具体的なイメージを獲得し、社会における人間関係や難題を乗り越える知恵を学び、自分の能力を育み、社会づくりを担う責任感と行動力を身に付けていくであろう。

②大人は、子どもたちの参加を形式的でみせかけのものにすべきではない。実際の地域づくりに子どもたちを自主的に参加させる方法



【子どもの参画の「8 つの階段」】

みせかけの参画	第１段	［操り参画］子どもが趣旨をまったく理解せず、大人の指示で動く
	第２段	［お飾り参画］大人の都合で子どもを利用する
	第３段	［形式的参画］大人の決めた枠内での子どもの発言や参画
本当の参画	第４段	［与えられた役割を認識した参画］
	第５段	［大人主導で子どもの意見提供がある参画］
	第６段	［大人主導で子どもも意思決定に参画］大人と子どもの共同作業
	第７段	［子ども主導の活動］子どもだけでプロジェクトの計画・実施
	第８段	［子ども主導の活動に大人を巻き込む］

（資料：ロジャー･ハート『子どもの参画』萌文社 2000）

をそれぞれの地域で独自に開発していく必要がある。大人は子どもたちの自律・成長を支える支援者（ファシリテーター）である。大人自身の能力の開発が求められている。

（5）違いがわかってこそ協力の心も育つ

子どもは一人一人違う多面的な力を持っている。そのことを子どもたち自身が知ることによって、子どもたちは役割分担しながら相互に協力する必要を学ぶであろう。

全世界を含めて、価値観や文化の違う他地域の子どもたちと相互に交流し連携する場を作っていく必要がある。違った価値観・文化を知った子どもたちには、違いを認める心が育まれるであろう。

2　大人が変わる

地域の教育力は、地域の大人たちが今を積極的に生きる中で培われ、それを通して子どもたちの「生きる力」も育まれる。大人が変わらなければ、子どもも変われない。

（1）子どもと真剣に向き合う

大人は、まず「聞く力」を持たなければならない。その上に立って、子どもが働きかけてくるさまざまな行為を正直に向き合って受け止め、子どもの意図を十分に理解した上で、その意図にはっきり応える行動（これは正解を意味しない）をとるべきである。子どもを時間で追いまわさない。

（2）子どもたちと一緒に楽しく活動を

大人は、子どもたちに指図（教育）するのではなく、継続的な地域づくり活動に取り組むという共通体験を通して、子どもたちとともに学べる人になる必要がある。それによって、大人自身も成長するであろう。

【事例】地域の子どもと大人の信頼関係を取り戻す活動

「荒町ふれあい塾」（山形県村山市）

（3）地域を自主的に管理･運営する

大人は、地域社会を上手に管理・運営し、常に発生してくる課題を解決していく創造力(これが社会力)を身に付けて、子どもたちに誇りを持って引き継いでいける持続可能な社会を創る必要がある。子どもたちに希望・夢のもてる社会を創ることが大人の務めである。「子どもは大人の背中を見て育つ。」のである

【子どもの手本になる生活づくり】

「自然生態系農業のまちづくり」を長年実践し、夜逃げの町という汚名を返上した宮崎県綾町の郷田實町長（故人）は、今の大人は「歴史上最も無責任な親だ。」と厳しく指摘し、これからのまちづくりは「子どもの手本になるような生活づくり」ととらえ、「お父さん、お母さんが子どもたちの手本になるような生活を営む」よう求めている。

（郷田實『結いの心』ビジネス社 1998 参照）

（4）社会参加を通して大人が自ら変わる

大人の社会力は、誰でも身に付けることができるが、大人だからといって自然に身に付くものではない。社会力は、よりよい社会をめざして積極的、主体的に地域社会

の管理に参加し、活動することを通して研きあげられる。地域のリーダーはある日突然誕生するものではない。

この社会に無駄な人など一人もいない。それぞれの人がそれぞれの興味・力に応じて社会参加することが子どもたちを育む大きな力になる。

（5）地域内外の人と広くつながり、学びあう

「三人寄れば文殊の知恵」である。地域内外に広くネットワークを張り巡らし、専門家や行政の人たちの力を引き出し、多様で実践的な知恵を学びながら、自ら地域を管理・運営するようにする。

Ⅲ　子どもたちが育つ地域社会の再生・創造のために

地域の教育力とは、「個人、組織（団体や機関）による多様な社会的関係の相互作用の中から生みだされてくる社会的な力を基盤とした、子どもたちの育ちを支える働きかけ」である。

地域の教育力を支える基盤は大人自身の「個人の力」であるが、個人だけでは限界がある。個人の力を集め（「組織の力」）、ともに考え行動する（「協働の力」）ことで、個人の力の限界を乗り越えられるであろう。

１　「社会力」の獲得と向上

社会力を身につけた大人の知恵や行動そのものが「地域の教育力」になる。大人が子育てに関わる協働体験をとおして、子どもを含む人びとの間に新たな信頼関係が生れ、地域への愛着も醸成される。それを基盤にして、地域社会の問題を認識し、解決していく力をみんなが獲得できるようになる。こうして地域で子どもたちを育む活動に取り組むと、大人や子どもたちの「社会力」はいっそう高まっていくであろう。

（1）イノベータの役割を果たす人たちの支援

①子どもの育成に関わる既存の地域組織や活動には前例主義など形骸化したものも少なくない。子どもたちの自律を促すという視点に立って、地域の人や行政は、既存の地域組織や活動にみられる硬直的な事業のあり方を根本的に見直すとともに、それを革新する勇気ある行動をとっている大人たちを支援すべきである。

【事例】慣例を打ち破る気概を持ったイノベータ

「GAT’S」（山形県東根市）

②大人（特に親）は、子どもたちを学校などに預けてしまうのではなく、地域に住む人たちと協働して子どもを育む活動を自ら実践し、形骸化した既存の地域組織や活動を革新する必要がある。

（2）子どもたちが社会的責任を担う機会・場の創造

①子どもたちの力の成長にあわせて子どもたち自身が責任を引き受ける仕組みづくりを行う。異年齢集団による子どもたちの活動や遊びが大切なのは、子どもたちが歳相応の責任を取ると

【事例】発達段階に応じた出番をもって社会的役割を学ぶ

子どもたちの相互交流（PALPAL交流）（岩手県千厩町）

ころにある。

②大人や行政は、子どもや青年が主役となって活動する機会をたくさんつくる必要がある。情報や資金の調達など、大人や行政は、「黒子」の役に徹して子どもたちの活動を支援する必要がある。

【事例】教え・教えられる継承システムの中で育つ地域を担う人材

福田十二神楽（福島県新地町）

（3）ワクワク、ドキドキする感動体験の場の創造

子どもたちが心揺すられるような感動を味わうのは、大人が用意した決まりきった行事ではなく、子どもたち自身でつくる活動をやり遂げるなかである。一つのことを自ら計画し、成功させるなかで初めて子どもたちは、自己実現や達成感を得、自分自身への自信や地域への愛着を自分の中にかたちづくっていくものである。

【事例】感動体験が青年の自信を生み、青年を変革する（福島県大玉村）

一般に、村に残る青年たちは、子どもとして成長する時期に、地域社会で中心的な役割を果たすことはほとんどない。その結果、自ら何かの活動の中心になろうという意欲も、それを担う自信にも欠けている場合が少なくない。福島県大玉村では、そういう青年たちが自ら成人式を企画し、成功させた。これが、青年たちが変わるきっかけになった。

この成功を契機にして大玉村元青年会と若い青年たちが一緒になって、演劇公演活動に取り組み、総勢 60 名の実行委員会が組織された。青年たちは、この演劇公演でも人口 9000 人弱の大玉村で 1000 名を越える村民が集まり、会場の体育館を埋め尽くす光景を目にすることになった。これは戦後のことではない。21 世紀も始まろうという今の話である。

大切なことは、村民に支えられて成功したという実感を青年たちがもったことである。青年たちは、責任をもって企画・実行し、それを成し遂げることによって、地域における自分の役割と力を体感することができた。彼らは、ますます地域への愛着を強め、次の活動に向かっていき、それを成功させている（田んぼを会場にした「おおたま冬の火祭り」、自主企画映画「レヴォリューション　20 歳」などなど）。

映画「レヴォリューション　20 歳」の主人公となった、かつての暴走族のリーダーは、上映会の席で次のように感謝の言葉を述べている。

『高校生の頃、おれは悪いことばっかしやってきた。考えられる限りのことをやっていた。いま考えると、嫌がられるのは当たり前でした。‥‥この映画は皆に支えられてできました。それは大玉村だからできたんだと思います。おれはこの村が好きだし、誇りに思います。』

2　子どもたちを育む地域活動の拠点（学校）づくり

①学校・行政中心の子育ての限界は明らかであるが、同時に、日常生活圏域に満遍なく配置されている学校（とりわけ小中学校）は、子どもにも大人にも地域への愛着を生みだす基本的な要素となっている。学校（特に、農村地域の学校）は、これからも子どもたちの「学力」増進の場として大いに力をつけていく必要がある。

②子どもたちの学力増進の基盤は、子どもたち自身が持つ多様な好奇心である。それに応え、積極的に学ぼうという子どもたちの意欲を引き出すのが地域に暮らす大人の務めである。

（1）学校を拠点にした子育ての協働関係の創造

学校は、地域の人々が子どもたちとともに「地域に学び」、「地域を支える」活動を行う場となって、地域における子どもの活動と子どもをめぐる大人たちの活動の拠点になるべきである。

【事例】学校を基地に大人の集いと活動をつくる

「一小賢明」の活動（宮城県塩竈

地域の人々は、子どもたちの学校外活動が学校を拠点として行われるように、保護者や住民とともに協議、決定し、それを実践する具体的な行動をとるべきである。

【事例】学校と地域との連携の場づくり

中高の連携と教育内容の相互乗り入れ（山形県金山町）

（2）子どもの学校外活動の拠点としての学校づくり

①過疎地ではスクールバス通学が一般的となっているし、少子化が進んでいる。子どもたちは、通学路で「道草を食う」ことや集団で群れ遊ぶことがほとんどなくなっている。農山村でも子どもたちは、地域をほとんど知らないまま育っている。

②農山村地域には、子どもたちの学習意欲を掻き立てる自然素材は無限にあるが、人間関係を学ぶ場は、人口が少ないことや社会関係が比較的単純なこともあって、十分とはいえない。農山村では都市部以上に大人社会との接触の場を意識的に作っていく必要がある。

③農山村地域にある自然素材も、それを活かした冒険遊び（自然体験）や農林漁業体験を伴わなければ、学習意欲を掻き立てる材料にはなりえない。農山村地域そのものが子どもの学力（学ぶ意欲）を低くしているわけではなく、地域の素材を活かしたり、多様な人間関係を学ぶ場を地域の人々が意図して作ろうとしない結果、子どもたちの学力の低下を招いていると考えるべきである。

④放課後における子どもたちの居場所として、また社会的関係を多様に学ぶ場として、地域の大人は、学校という空間を多面的に活用すべきである。社会的人間としての子どもたちの成長は、子ども相互の遊びや大人社会との接触を通じたインフォーマルな活動に拠るところが大きいので、学校内でも非公式な場を多様に作り出す必要がある。

学校や子どもたちを教師の管理下におかなければならないという従来の考え方を捨て、学校を多面的に活用するという視点に立って、新たな管理・運営方法を地域の人たちといっしょに作り上げるべきである。学校に対する発想を根本から転換しなければならない。

【事例】学校を子どもの居場所・勉強・遊びの砦にする

学校外活動プロジェクト（シアトル市（ｱﾒﾘｶ））

3　地域における協働関係の創造

地域の大人は、子どもたちを育む社会環境づくりに関する認識と目標を共有する努力をしなければならない。これが地域における協働の出発点である。

そのために、地域の子どもと大人が議論し、行動する場を意識的に設ける必要があ

る。子どもたちの協働、大人の協働、そして子どもたちと大人の協働。地域社会における子育てやその環境づくり活動を各地で無数に積み重ねていくことが必要である。

（1）子どもをめぐる共通理解と目標の設定

①地域の人たちや学校、および行政機関は、子どもたちについて率直に意見や情報を交換し、語りあう機会をもつべきである。この議論の積み重ねが子どもや子育てをめぐる諸情報や目標、その実践の方向を地域の人々みんなが共有していく力になる。

【事例】地域会議をとおして地域の状況にそくした施策をつくる

「子ども・青年政策」（シアトル市（ｱﾒﾘｶ））

②子どもも社会を構成する重要な一員である。子どもたちが意見を表明したり、実質的に参画できる機会を設けるべきである。

【事例】子どもの育成計画策定を契機に議論を組織化する

エンゼルプラン策定に子どもが参画（宮城県塩竈市）

この場合、子どもたちのことについて地域の計画を作成・決定し、そのプロジェクトを実施する活動に子どもたち自身が実際に参加することが必要であって、形だけの参加は許されない。

（2）活動を財政的に支える仕組みづくり

地域で子どもを育む活動を行う諸団体は自主財政基盤を整備しなければならない。行政は、地域社会における子育てやその環境づくり活動を安定して持続的に実施するために、財政的、組織的な条件を整備すべきである。

【事例】自主的な市民活動を支える財政支援システム

「子ども未来フォーラム」実行委員会への財政支援（仙台市）

行政は、地域の人々ができるだけ自前で活動するという視点から地域の人々による資金調達のノウハウや情報を提供して、諸団体の自主財政整備に協力する必要がある。それぞれの自治体や企業は、地域の実情にあわせて地域の住民活動の自立を促す助成制度などを創設すべきである。

【事例】財政的支援システムで、活動の継続性と質の向上をはかる

「子ども夢基金」の活用方法の再検討（宮城県塩竈市）

（3）参加にもとづく協働関係の創造

①地域を基盤とした子育ての仕組みをつくる場合、地域にある既存組織（その多くは地縁団体）との連携だけでなく、NPO など志を同じくする新しい団体や高等教育機関などとの連携も強め、専門的知識や情報を積極的に活用していく必要がある。

【事例】協働のなかで柔軟で魅力的なサービスがつくられる

自主的な共同学童保育「アドベンチャーファミリー」（仙台市）

②行政は、サービス提供型から活動支援型に転換して、これらの諸団体を積極的につなぎあわ

【事例】参加を重視した新しいシステムをつくる

コミュニティー・アプローチの方法（シアトル市（ｱﾒﾘｶ））

せ、地域の人々の間での協働を促進する。行政は、「人々をつなぐプロ」としての行政手腕が従来以上に問われることになろう。

Ⅳ　子どもを育む地域活動は地域づくりの原点

（1）社会の中で子どもは育つ

子どもたちが自主的に進めるいろいろな遊びや活動の場が非常に希薄になっているので、大人は、自分の子の有無に関係なく、地域社会における子どもたちの主体的な活動を助長することに全力をあげる必要がある。

大人は、既に活動を始めている諸事例に学びながら、自分のできるところから子どもたちを地域で育む環境づくりの行動を開始し、同じような問題意識をもっている仲間を集めて多様でゆるやかな連携集団（NPO など）をつくること。さらに目標を共有する仲間を広げ、その実現に向けて情報や金・力を出し合い、協働すること。

（2）企業にとって広い意味での人材育成

企業は、その活動を通して、さまざまな職種の専門的知識をもった人材や情報を蓄積している。企業の経済的活動は、子どもたちに職業体験の機会を与え、仕事に対する具体的なイメージを形成させる。その仕事体験は子どもの将来に大きく影響するであろう。

企業は、社会の一員として社会の子を育てるという視点から、仕事体験の機会を積極的に提供すべきである。

（3）地域住民の活動を支え、それと連携する学校や行政

子どもを育む主体は住民であり、それを支援するのは行政である。行政は、地域の大人たちが地域の子どもや子育ての状況についての理解や共通の目標を形成したり、自主的な活動を行うよう促進して、地域の人たちの活動と連携・協働する新しい関係をつくる。

学校は、子どもたちの「学力」増進に専念できるように、「授業」も含めて学校の活動内容をもっと外に出していく。子どもたちの意欲を引き出す多様な社会活動体験や仕事体験を地域社会の人々や企業に任せるべきである。地域の実情に即しながら、地域独自のしくみをつくりつつ、新たな学校のあり方を探っていくことが必要である。

以　上